

## 第3回「福井県立歴史博物館、幾久公園の基本的方向性」検討委員会 議事要旨

### ■求められる機能、役割について

#### 【博物館と公園の間のスペースについて】

- 博物館の近くに、お子さんを連れだご家族が走り回れるような場所があること、体験型イベントができるスペースがあることが羨ましい。屋根があつてお弁当を食べられて、綺麗で清潔なトイレもあり、泥んこになった場合も手を洗ったりちょっとしたシャワーみたいなものがある、いわゆるクラブハウスのな、ちょっと素敵な休憩所があると良い。
- 家族連れをターゲットにすることに加え、運動メインで来られる部活の高校生やご年配の方が、ロッカーに荷物をおく、活動後には顔を洗ってさっぱりし、おやつを食べて休憩するようなクラブハウスのな機能があれば、博物館と公園の中間のグラデーショナルなスペースとなり、敷居が曖昧になって、将来的な相互利用につながるのではないか。
- ライトユーザーへの配慮がキーポイントとなる。運動公園と歴史博物館の中間的な場所としてのバッファークがうまくいくと、全体として成功するのではないか。クラブハウスのなものや自由に使えるライブラリー機能など、「行ってみたい」と思えるエリアが育つと良い。
- 土曜、日曜、夜間の営業や、お酒も楽しめるカフェレストランがあると良い。
- 博物館と公園の一体化にとって博物館の入り口の向きが重要で、入り口がトラック側に面していると広がりや入りやすさが大きく変わると思う。
- 博物館は、公園に向けた開放感が重要で、カフェレストランという形がよいのか、あるいは別の形態でもいいのかもわからない。
- 博物館は基本的に無料であり、料金徴収も可という原点に立ち返ると、博物館の入り口はひとつではなく、複数設けて無料スペースを拡充する考え方もある。金沢 21 世紀美術館では、管理は大変になるものの、ショップやカフェを複数方向から利用できる。博物館に人を呼び込むために、複数の入り口を設け、カフェや無料または参加料金のみで体験できるハンズオンやワークショップ等を、公園に面した場所に配列していくと、よりオープンになるのではないか。またそのために、現在噴水のあるスペースを全面芝生にする等、公園側も見渡せる仕掛けが必要でないか。
- まず「1 回行ってみよう」と思ってもらうため、館と園の間のスペースでフリーマーケットや骨董市、祭りなどを実施できると、そこから公園や博物館の利用が広がり、継続的な利用につながると思う。
- 「余白の空間」「敷居をなくす」といったキーワードを踏まえると、館と園の間のスペースはゾーニングを明確に区切らず、公園と博物館がつながり、イベント開催にも利用できるような、混ざり合い重なり合う空間構成を検討してほしい。
- 博物館と公園の間の使い方として、体験プログラム、サポーター、キュレーター、空間が非常に大事。博物館側では、1 階フリーゾーンに余白空間をつくりながら、歩いているだけで楽しいような、場所ごとにいろいろな体験や活動ができるような場所をつくって、公園と回遊性のある利用につないでいくことが大事。また最後は運営体制を含めたそれらのデザインが大事。
- オープンスペースを活用し、県内の他の博物館と連携したイベントを行うことも、県民にとっては面白いと思う。
- 最終的には、公園と博物館をつなぐデザインをどのように具体化するかが重要だと思う。合わせて、プログラムや人員配置、サポーターを含めた運営体制をどのように具現化していくかが課題になる。

#### 【博物館について】

- 博物館には体験的な活動が求められている。指宿市考古博物館では、考古に直接関係しないレジン工作を毎日することで親子での来館が増え、楽しい体験を入りに(博物館本来の展示への)入館者が伸びている。市民と学芸員の活動をつなぐワークショップなどの仕掛けづくりをできるだけ作っていただきたい。

- 博物館法が改正され、「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」についてパブリックコメント募集が行われ、各地で勉強会が開かれている。そうした動きに触れ、新しい考え方を取り入れていくことも大事である。
- 博物館の会議室は奥まった位置にあるが、会議に限らず地域イベントや特別展示にも使えるフリースペースとして、動線面でも使いやすくなるとよい。さらにカフェとつながる配置なら、会議中にコーヒーを提供してもらいやすくなる。
- 今回のリニューアルは前回から約 20 年を経たものであり、今後 20～30 年を見据えたリニューアルでないといけないし、県の文化財の中核施設としての役割を果たすものでないといけない。また周期的な大地震の発生も想定し、収蔵施設の改善、あるいは受け入れ容量の拡充(現状の倍以上)を図る必要がある。

#### 【運動施設について】

- 土のグラウンドは雨後に水たまりができやすく汚れやすい。トラックをウレタン塗装と土で半分ずつにする意見案があったが、費用は高くても、利用のしやすさを考えると、できれば全面的にウレタン舗装にしてほしい。
- ゲートボール場に、別のスポーツ施設を設けてはどうか。一つの案として、フットサルほどの面積はとれないが、オリンピック種目の 3×3 バスケットなら 15×11 メートルで可能。需要の点はあるが市内に屋外でできる場はなく、利用増や公園全体のつながりが期待できる。
- 幾久公園はスポーツ利用に貢献してきた歴史があることを踏まえて継続することは非常に大事。ゲートボール場については利用もないため、現在の流行や将来の見込みも踏まえた新たな施設整備に加え、定期的なイベント開催等のシステムづくりも大事。
- トラック中央の大きな空間は、フットサル等の利用も含めて検討するといいいのではないか。

#### 【緑地について】

- 緑の評価については、公園単体の評価に加え、周辺の緑や鎮守の森など外とのつながりを含めて重要性を捉える方法もある。
- 公園には「落ち着き」と「外からの見通しがいい」という、相反する要素があるため、厚みのある植栽は残しつつ見通せる軸線を確保し、要所で開放性を持たせる方向が良いのではないか。
- 公園のベンチは、太陽の位置との関連を踏まえ、季節や時間帯において必ず日陰になる場所に複数台確保されているよう設置できるとよい。

#### 【運営について】

- 現状の学芸員数では、新たに地域と博物館をつなぐ業務や催しの企画は難しいのではないか。実現するには増員が必要だと思う。
- 管理運営者が運動施設だけでなく、休憩機能や公園という環境をつかった魅力付けをしていくと、自ずと公園と博物館が密接につながる、あるいは博物館の管理者が公園管理をするなど、博物館と公園をミックスする管理運営方法が今後の課題になる。
- 多様な立場で来館する人に楽しんでもらう体験プログラムと、それを支える人材、そして空間の充実が必要である。
- ボランティアの受け入れは県民の博物館への積極参加の一形態であり、博物館活動を豊かにしてくれる。しかし、ボランティア組織の運営は、有給職員による丁寧なケアが不可欠であり、職員人数の不足を補うことだけを目的にするのは避けたい。
- (これまで以上に)公共の場として博物館を機能させるためにはオープンスペースを増やし、ボランティアに活動してもらう必要がある。職員は現在、独自展示で手一杯のはずなので、リニューアル準備、さらにリニューアル後のワークショップやボランティアとの連携を考えると、現在は6人だが、少なくとも9人、理想では12人程度への増員が必要だと思う。

## ■コンセプト(案)について

- 「ミュージアムパーク」は、茨城県自然博物館の他には見られない言葉であり、規模も異なるが、博物館と幾久公園をつなぐことが伝わりやすく、耳に残って響く言葉なので、前面に出してもよいと思う。
- D案は、「織りつぐミュージアムパーク」と短縮してもよい。
- 茨城県の場合は本体が自然博物館であり、15,8haの広大な公園内の自然観察や体験プログラム施設、遊びの場が博物館のテーマと有機的に繋がっている。歴史系でも工夫をしてミュージアムパークができれば興味深いと思う。一乗谷もミュージアムパークと捉えることができ、課題を共有しながら楽しい組み立て方ができるのではないか。
- ミュージアムパークというのは、今の公園の特性、博物館の特徴を考えると、すごくいいと思う。「パーク」には公開された公共空間というイメージもあり、これから目指す方向性を示せる言葉である。福井は、茨城県自然博物館と比べて、スポーツをしながらミュージアムに触れるという特徴とともに、「福井のミュージアムパーク」として打ち出せると思う。
- ミュージアムパークという言葉は非常に適しており、個人的にはぜひ残してほしい。
- 「福井の宝」については、基本的には文化を発信する、文化を継承するものであってほしいので、「宝」という言葉を入れながらキャッチフレーズを作っていたらいいと思う。
- 「宝」という言葉はよいキーワードだと思う。「宝」だと文化財だけが宝というニュアンスをイメージするが、「福井の宝」だと人も含めた宝という見方ができるのかなという気がしたように思う。
- 「織る」という言葉は素敵だと思った。公園と博物館、人と人、多様な世代、過去と未来など、さまざまな経糸緯糸が掛け合わさり重なっていくイメージが浮かび、ワクワクする言葉だと感じた。
- 博物館は「自身のルーツと向き合う」という言葉が強く印象に残った。意図として強調すべき特徴だと思う。自分のルーツを知ることによる新しい発見と、福井の新たな発見が組み合わさっていくと、非常によい表現になる。自分を織りあげるという視点では、健康やスポーツも自分を織り上げる行動のひとつと思う。
- 現在・過去・未来で考えると、先人の知恵と、今の自分と、ふるさと福井に向けて、どういったものを作りたいかというのを物語にするとよいと思った。経と緯の糸をどう言葉でつなぐかと点については、意図の中では、モノの力、場の力、文化資源、多様な活動とばらばらになっているので、経緯の2つのキーワードを何にするのか、さらに過去・現在・未来で博物館が目指すべき目標、到達点のようなものが表現できるかという点も思った。
- 福井の繊維産業は世界的に評価され、未来に羽ばたいている分野であるため、コンセプトの説明に盛り込むのはよいと思う。県外の人には強く伝わり、県民にとっても新たな気づきとなり、対外的にもPRとなる。